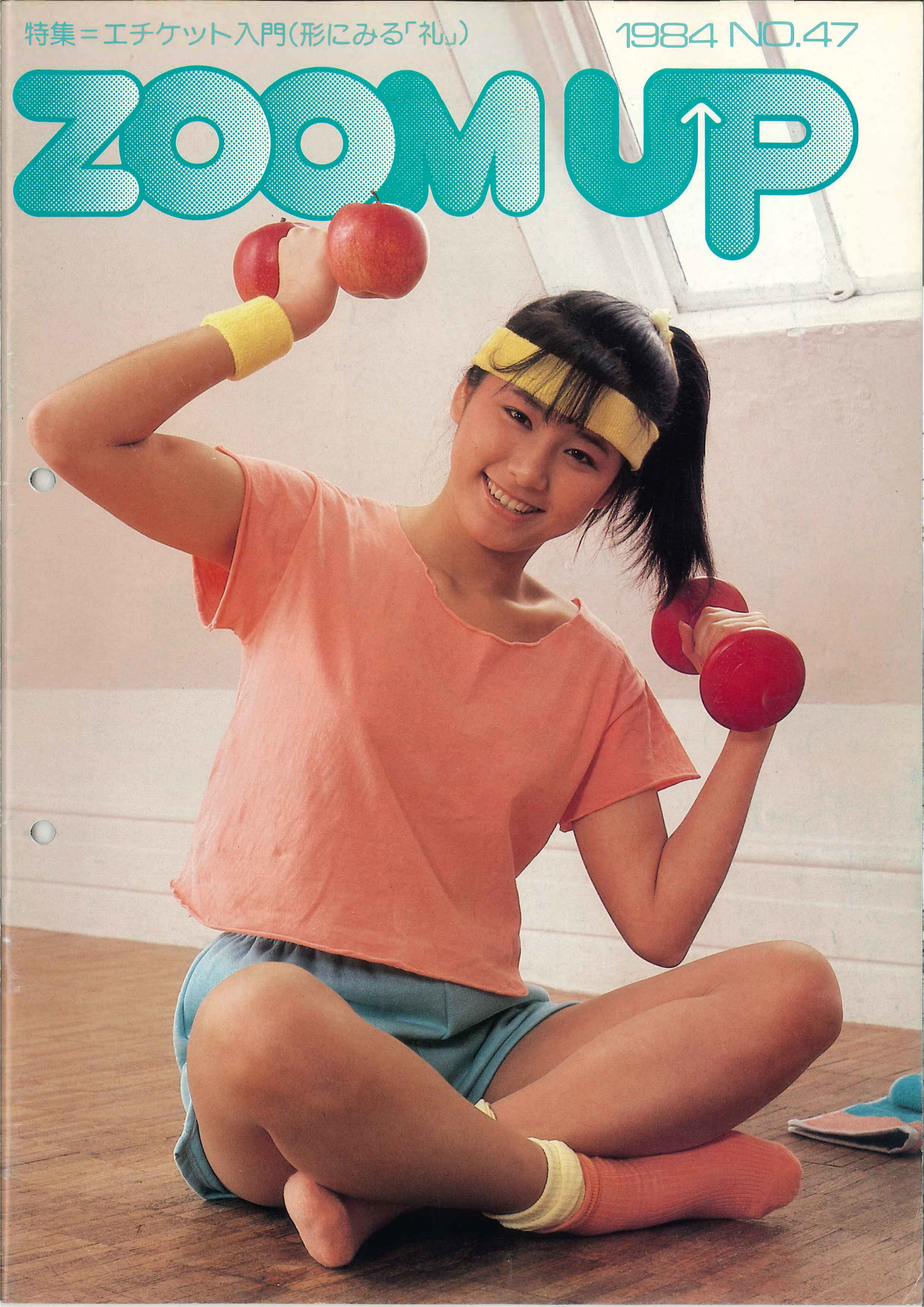
特集＝エチケット入門（形にみる「礼」）

1984 NO.47

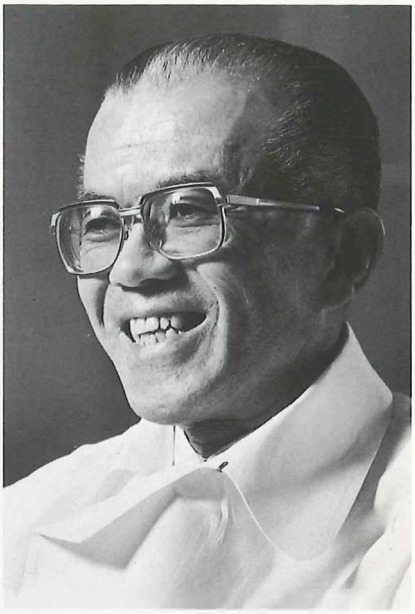
ZOOM UP



歯界展望

長田 保

神奈川歯科大学附属病院長



わが国の歯科医療界の大先達である檜垣麟三博士を初代学長として昭和39年に創設された神奈川歯科大学。

その３代目附属病院長として既に10年。温和な人柄と研究熱心さで、学生はもちろん、歯科界での評価もきわめて高い。

「恩師檜垣先生と共に当大学に参りまして、今年で丁度20年を迎えます。大学病院の役割は、巣立つ歯科医師のための院内生臨床実習と医員研修、そして地域住民の歯科医療向上に貢献すること。また開業医や卒業生の生涯研修の場の提供、さらには身障者や難症例などの治療を通じた地元歯科医の先生がたとの協力体制も重要な役目だと思っています」

丁寧で穏やかな口調、しかし研究者らしく、そのお話しぶりは整然としていてよどみがない。

お生まれも育ちも東京・大井町。開業医の長男として跡をつぐべく進んだが、根っからの研究好きで、大学生活通算40年余り。

歯科大学の教育と内容についてお伺いすると――「進歩発展が著しい医療界の現実をみますと、６年という限られた年限では、とても全てを教えることは不可能です。本学では卒業直後の研修機関として、数年前から「綜合診療室」という研修制度をもうけ、臨床的技術の体得はもちろん、患者さんに愛情をもって接することが出来る歯科医。それに生涯勉強しつづけ、質の高い医療を身につける向上心。これらを目的として特別な卒後研修クラスを作り教育しております」

ご専門であり、長年研究されて来た臨床医待望の合理的根管治療の成果がいま誕生――

「ご存知の通り、根管治療の最大原則は、根管をきちっと拡大形成し、過不足なく充填することです。その形成段階――すなわち拡大から清掃までを超音波の使用により、迅速かつ正確に行えるようになったのです。もちろん、これで完全というわけではありませんが、臨床医にとって朗報であることは確かだと思います」

今後の歯科医療の具体的方向については――

「これからは歯科医個人の力ではなく、コーデンタルスタッフ全員の協力のもとに医療が行われていく時代ではないでしょうか。そのような観点から当大学では、日本女子衛生短期大学と技工専門学校を併設しています。それぞれのスペシャリストが、歯科医療という一つの目的のためにグループで力を発揮、綜合的な見地にたった医療を行えば、現在よりはさらに高度なレベルでの歯科医療が施されると思います」

ご経歴が示すように、病院長以外にも数多くの役職を兼ねておられる。臨床も研究も、そして行政面においても……。

健康に留意されながら、活躍して欲しい57才の指導者である。

〔経歴〕

大正15年：東京都に生まれる
昭和23年：東京医学歯学専門学校歯学科卒業
昭和33年：東京医科歯科大学保存学教室講師
昭和34年：同上　助教授
昭和39年：神奈川歯科大学保存学教室教授
昭和48年：同上　附属病院長　現在に至る
他に日本歯科保存学会理事、医療関係者審議会委員、歯学教授要綱改訂委員会委員長、私立歯科大学協会病院部会長などを兼任。

ZOOMでCLOSE-UP：誌上交友録

藤本順平先生の巻

中央区銀座３－７－16 銀座NSビル７階

日本の歯科医療界の歩みを振り返ってみると、昭和30年代後半から40年代にかけて、それまで欧米から輸入された学問と臨床方法が国内でも実を結び始め、急速に発展。ご存知の様に内容・実績ともに世界に通用するだけの花を咲かせました。しかし、この発展の――経済界等においてもそうですが――追いつけ追いこせ主義が社会に様々なひずみを生じ、現在、多様な問題をかかえる一因となってしまった事も、また確かなことではないでしょうか。

そうした中、歯科医療界にもここ数年、新しいイデアと行動力を持ったこれからの時代を担う先生が各地に誕生してきたことは、非常に喜ばしい限りである。

今回の誌上交友録は前回深田先生のご紹介により、東京・銀座にご開業中の藤本先生をお訪ねした。先生は九州歯科大学を卒業後、東京医科歯科大学専攻科、九州歯科大学口腔外科大学院を経て、実家（北九州）でお父様と共に診療生活を３年経験。その後、渡米しインディアナ大学にてマスター称号を受けると共に、米国歯科補綴専門医のサーティフィケートも獲得。さらに、フロリダ大学で助教授として咬合並びに歯冠補綴科の主任をされる。フロリダ大学時代には、その年度で最も素晴らしい講議と人気のあった教授としての最優秀臨床教授賞を受賞された、というだけあってスマートで洗練されたマナーとお話ぶりで、アメリカと日本の歯科医療界の違いや、ご活躍の現況など有意義なお話をして下さった。

「大きな違いのひとつは、教育制度ですね。ご存知の通り、米国では４年制の普通大学を卒業してきた人達が、プロフェッショナルスクールとして歯学・医学または法科等に入学しますから最低年齢でも22才。いろいろな学部や実社会を経験した人たちも入ってきますので、雰囲気も態度も日本と比べてややマチュアーな感じがしますね。また、徹底的に臨床を中心とした合理的なカリキュラムが組まれてますから、例えばクラウン・ブリッジに関して言えばフルマウスの治療を済ませて卒業する学生が何人かいる程です。そうした経験を学生時に受けられることは素晴らしいことだと思いましたね」

アメリカでは州によっては卒後も毎年決められた単位を修得しなければならないシステムがあるなど、卒後教育も厳しいようである。

「それぞれ一長一短はあるでしょうが、米国の場合、臨床を正面から見据えているといった感じがします。私の感じる限り日本ではややアカデミックな面に重点を置きすぎる傾向がある様に思えるのですが……」

現在、歯科医師の増加、保険制度の改正など様々な問題が、日本の歯科医療界で話題になっていますが、そうした点については……。

「悲観的な意見が圧倒的に多い様に感じますが、現実は正しく受けとめた上で、もっと建設的な意見が欲しい様な気がします。見方を変えて歯科界がレベルアップする好チャンスとして積極的な姿勢で将来を考えたらいかがでしょうか。最前線にたつ開業医の先生方が患者を啓蒙し、レベルの高い治療を施すことです。どんな世の中になっても歯科医は必要なのですから、前向きに現状をとらえること。その姿勢が大切だと思いますね」

アメリカに行かれて、先生ご自身どの様な事が最も良かったとお思いですか。

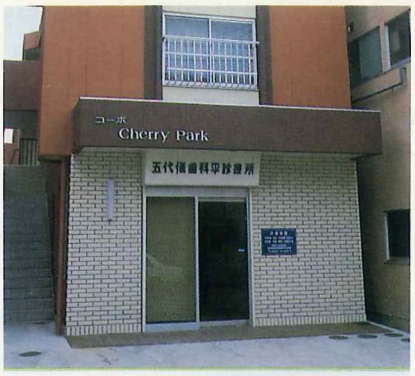
「良い勉強ができたという事もありますが、世界中に多くの友人・先輩ができ、視野や考え方が大きく広がった事。それが私の人生にとって素晴らしい経験と今後歯科医として生きる豊かな心を育ててくれた事。それが最も良かったと思っています」

先生は『藤本補綴臨床研修会』と称し、咬合とクラウン・ブリッジの実習を中心とした１年間コースをもたれている。

「今年で５年目になります。この研修会は日常臨床の中で咬合理論をどのように整理・理解し、それをいかに臨床に応用していくか、またクラウン・ブリッジの臨床力をどの様にアップするのか――という点に重きをおいて常に実践的内容で行っています」

来年の６月には、アメリカにおいて、クラウン・ブリッジの教科書をだされるという。現在も日米を往復しつつ、両国の臨床医や学生の育成に全力投球の毎日である。夢中で欧米を見習い生きてきた時代から、それを消化し、歯科医療界にも新たな国際人、世界的なニューリーダーの誕生が始まってきている。我々共に歯科医療界に身をおく者にとって嬉しい限りである。

「一生、臨床の場を離れたくないですね」最後に先生が言われた言葉が全てを表わしているのではないだろうか。



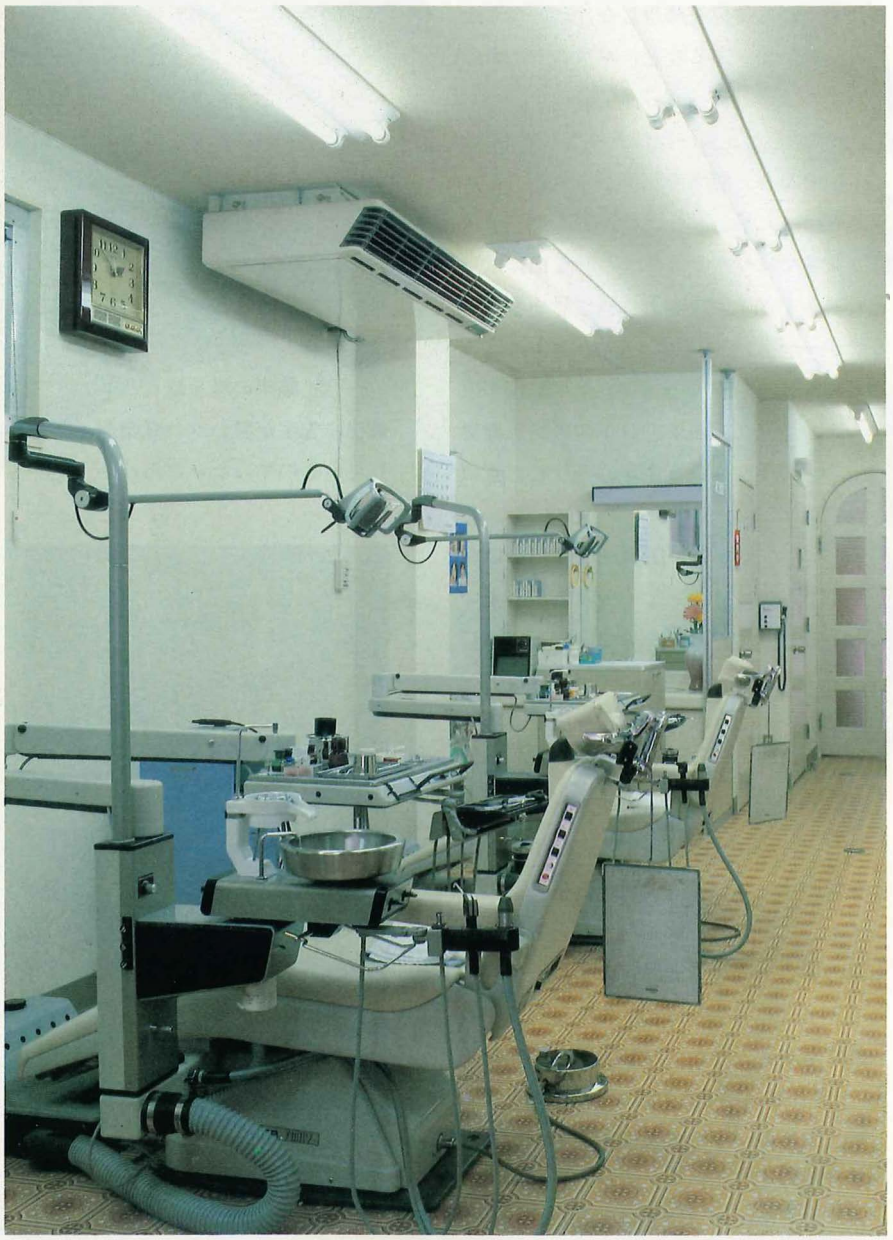
診療室拝見

医療法人社団 昭仁会

五代儀歯科医院

院長五代儀 昭

分院・福島県いわき市字材木町7　コーポチェリーパーク1階
本院・福島県いわき市内郷御厩町字長町46



常磐線平（たいら）駅より車で5～6分。五代儀（いとき）歯科医院は、いわき市の支部長を務める院長先生が、身障者や車椅子使用者が気軽に診療を受けられる歯科医院が少ないことを憂慮され、昨年11月、ここから5～6分の郊外にある本院から、交通の便利な街中に作られた分院である。

ユニットはスマイリーN2台と車椅子使用者ユニット・ユニオートR－3。これに独自のローラー付スマイリーNのチェアーをつけ、その他の身障者や又常時は一般患者にも使用される様つくられている。

従ってご紹介の写真は、内部は分院の写真、技工室（本・分院共通）は本院の写真を掲載することになりました。

ついでながら、本院内部をご紹介致しますと、ユニットはスマイリーN、GM合わせて7台が、波形につくられた前面ガラスに対面して並んでいる。待合室は三角形の最長部が道路に面し、ここが全面ガラスという、各部室とも採光を第一に考えられた設計となっている。

お生まれは青森県、中学時代から平(現いわき市）で育つ。34年に東京歯科大学を卒業。その後、県の元歯科医師会会長であられた石島先生のもとで15年間、副院長として勤務医を経験。現地に49年、本院を開業された。

Q：設計にあたって留意された点は？

A：オープンで常に患者さんと対話でき、病院の雰囲気で患者さんが圧迫されないように気を配りました。こちら（分院）に関しては車椅子の患者さんが、ムリなく治療を受けて頂ける様に、玄関も段差をなくし明るい感じに仕上げました。

Q：スタッフも多く、まとめていくのが大変でしょうね。

A：本院・分院合わせて、医師５名に技工士３名、アシスタント11名、総勢19名の大所帯。ですから、月に一度はみんなで会食しながら、注意事項を話し、あとはそのつど気が付いたところを注意する様にしています。これだけの人数ですから、あまり細かく目を光らせてもしょうがないですし、ある程度、呑気に構えている事が必要ですね(笑)石島先生の所での勤務医時代の経験が非常に役立っていると思います。

Q：そうしますと患者数も―

A：いえ、100人前後ですから、スタッフの数からいえば多くありません。ただ、私が国保の審査委員や中学のＰＴＡ会長等、10以上の役職をもっておりまして…。若く元気な内にできる限り世話になった地域の方々に貢献していきたいと思っておりますので、留守を守ってくれるスタッフのみんなには感謝しています。

Q：この辺の医院数は多いのですか？

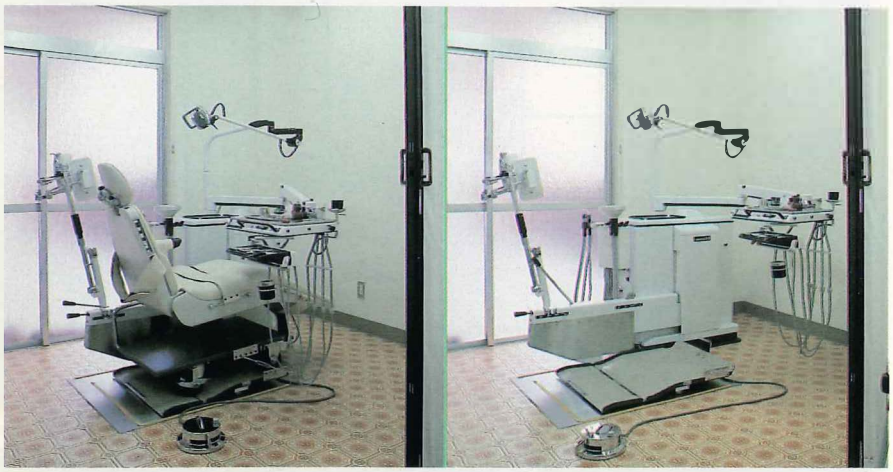
A：いわき市34万人に対し、134名の歯科医師会員です。これだけ広い市ですから、他県に比べて余裕はあると思いますよ。ただ、市内に集中する傾向はありますが…。

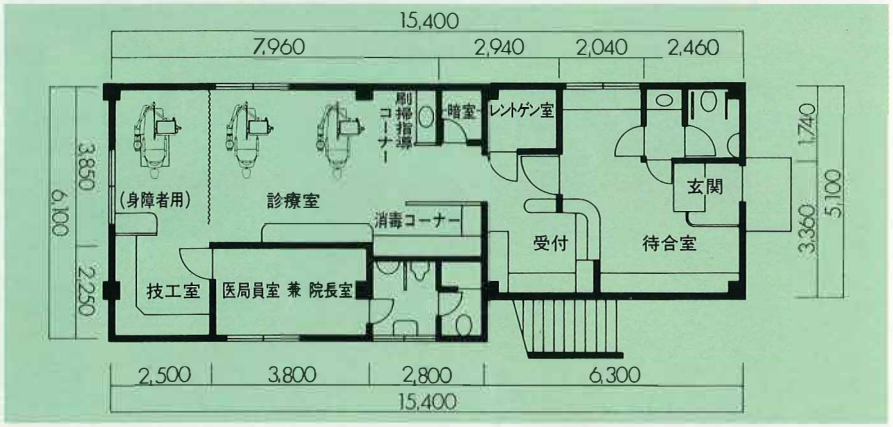
Q：保険の層についてはいかがですか？

A：社保が７割、国保が３割です。一割負担に関しては、社保本人の方がピリピリしていますよ。これは当院に限らず、医師全体に今後どのように影響されていくのか。大きな問題ですね。

Q：先生は歯科医師会いわき支部長の要職につかれてますが、福島県の歯科界の状況はいかがですか。

A：この県では以前から厚生技官が厳しく、レセプトや個別指導、差額徴収は絶対に許されませんでした。それが今日の厳しい状況時にはかえって良かったみたいですね。儲け主義といいますと語幣がありますが、患者数が多く、医院の少ない時代にそうした色に染まりませんでしたからね。知らない事の幸わせかナ(笑)。





ですから患者さんとの関係が今も親密で、歯科医同士の団結も強いと思いますよ。また歯科医師会も、年配の先生方が若い先生をたて、任かせてくれていますので…。非常にうまくいってる県だと思います。

Q：大変でしょうが、幸わせですね。保険制度についてもう少し詳しく話して頂けませんか？

A：問題の健保一割負担は、国の財政困難という理由で制度化されつつありますが、その悪影響は多大なものとなる恐れがありますよ。まず、患者さんの医療負担が重くなり治療が手遅れになったり、術者サイドにたってみれば、患者の負担を考え十分な医療を施せなかったり、様様な問題がでてくると思います。

Q：こうした状況の中、歯科医はどうあるべきだと思われますか？

A：確かに医院の増加に加え、世界的不況の影響もあって患者数は減少してくると思われます。そこで必要なのは、一般論ですが、患者の痛みが分かる医師であること。技術以上に患者さんの事を本気で考える歯科医ですね。そうした事により患者さんとの信頼を深め、地域の方々が健康な生活を送るために、地域住民の中に溶け込む姿勢が大切ですね。

Q：そうした事も含めて、これから巣立たれる若い先生に何かございましたら。

A：常に患者さんに親切にし、信頼を得ることが第一ですね。それが、いざ開業という時に患者さんがついてきてくれる事につながる訳です。これからの老齢化社会、患者さんと共に齢をとり義歯中心となっても、互いに昔の事を話し合える家族のような関係をつくり上げて欲しいですね。

Q：これだけお忙しい先生ですと、ご趣味の方は―

A：いやいや、学生時代からもう30年以上、週一回の麻雀は欠かしていませんよ(笑)。また酒やカラオケも好きですし。

Q：最後になりますが、当社のスマイリーN、GM等のユニットをお使い頂いてますが―

A：石島先生の所で、初めはオサダジュニア、次がズームとずっとオサダのユニットを使っていました。評判を聞いても文句ないし、開業時からオサダ以外は考えませんでしたね。これからも、どんどん使い易く能率的な商品を創りだして欲しいですね。

診療室拝見

黒岩歯科医院

神奈川県藤沢市弥勒寺4－6－5

院長黒岩 勝

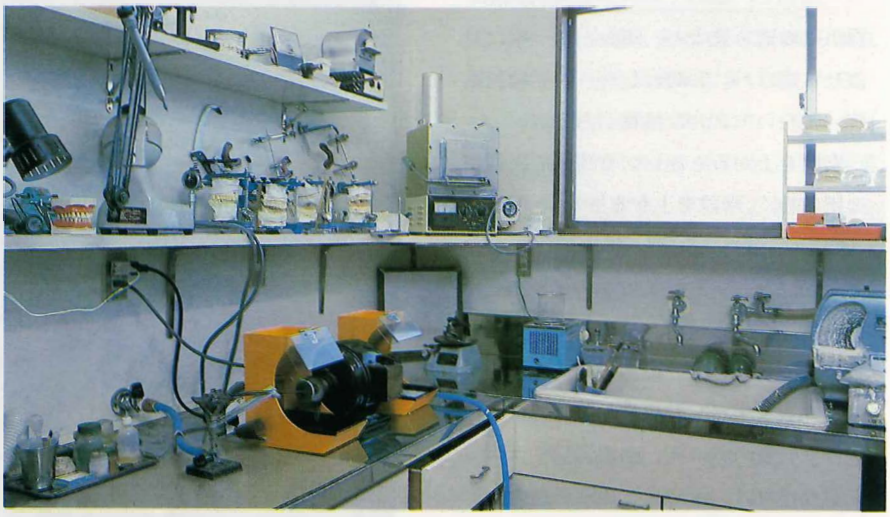
湘南の中心地として、近年ヤングタウンとして発展。国鉄、小田急線、江ノ電の交差する神奈川県藤沢市。その駅前から車で約5分。次第に静かな住宅地に入り、市内で一番古くからある藤沢団地を横手に坂道を登ると、鎌倉山が一望に見渡せる高台へ。お訪ねした「黒岩歯科医院」の白いモダンな建物がある。

玄関を上がると赤レンガ模様の絨毯が、2階に続く。階段を上がるとパッと明るい待合室に。白い壁にアールをとった受付を左側に、右側には茶のイスが5つ並んでいる。診療室はさらに明るく、3面が大きなガラス窓で、視線の先は鎌倉山。松の木肌を生かした自然な感じの壁に、コルク材質の茶の床。治療器具やユニットがなければ、そのまま山荘の趣だ。

ユニットは黒と白のツートンカラーのユニオートチェアーにジュニー、オレンジのスマイリーがゆったりと並んでいる。両方とも先生の特注商品。キャビネットにも、補綴物の研磨時に粉塵が散らないようにバキュームが装備されており、先生独自の工夫がなされている。

先生は福島県の会津若松のご出身。昭和8年生まれの51歳。東京歯科大学を32年に卒業し、その後慶応大学、東京女子医大の口腔外科で5年間の医局員生活を送り、37年に現地に開業された。

Q：見はらしの良い診療室ですね。ご改



築なさったのですか？

A：この地に開業して、ちょうど20周年の記念にと57年の９月に増改築いたしました。以前は一階が診療室でしたが、せっかく来院なさって下さる患者さんに気持ち良く受診して頂きたく、見はらしの良い２階に診療室をもってきました。私の眼の健康にも良いですよ(笑)。松やコルクなど自然な材質を使用したのは、長年使用していく内に味がでてくるからです。

Q：ユニット等の配置は―

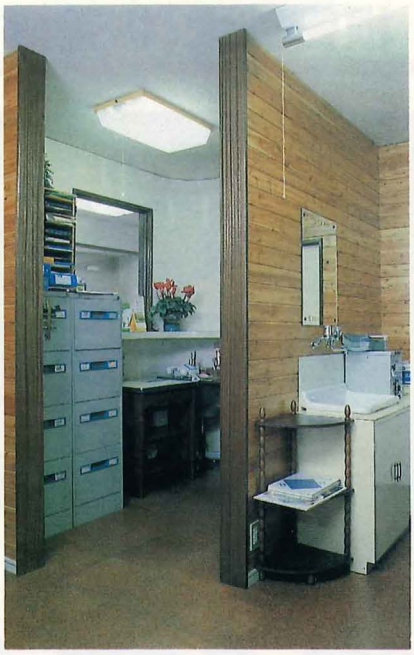
A：患者さんと私の動線がクロスしないように、またキャビネットも余計な動きをする事なく使用できるように配置しました。この診療室は、新・改築含めて４度目で十分考えた結果ですので、だいたい満足しています。今回の増改築は、加納建築設計事務所という施工屋に依頼したのですが、１ヵ月で完了しましたよ。

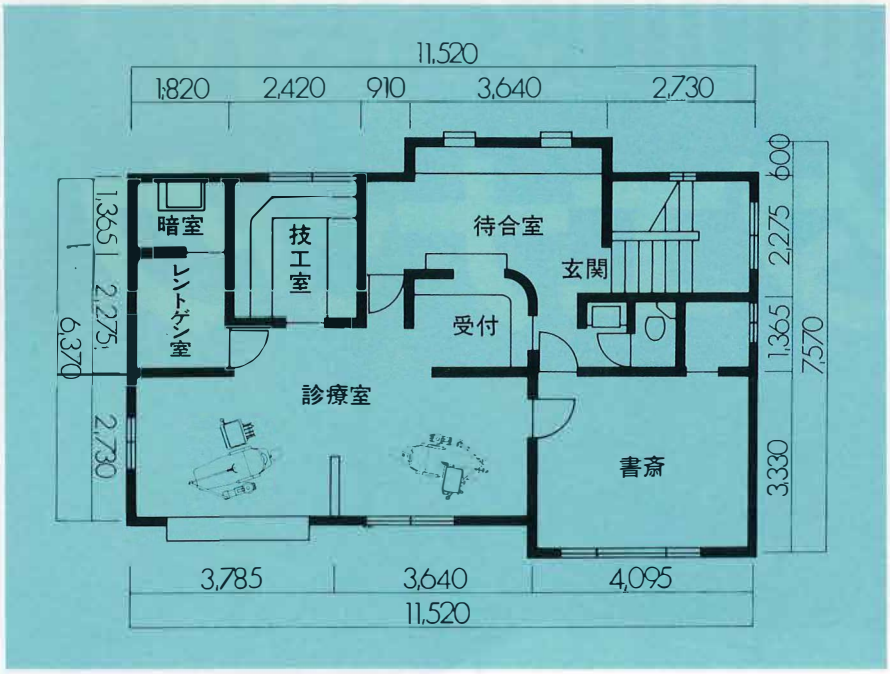
Q：先生は初代でございますか？

A：ええ、歯科医は私ひとりです。

Q：どうしてまた、歯科の道へ―

A：会津にいた時、隣に歯科医の家族の方がおりまして、子供の頃から非常に親しくしていました。その先生が戦争直後、戦地から引き上げ古い足踏式のユニットを借り、やかんで水を注ぎ一生懸命にやっていらしたのを手伝っている内に、この道に進む決意をしました。人と人との





出会いとは不思議なものですね。

Q：開業当初と比べて、現在と患者層の違いはありますか？

A：ご存知の通り、開業当時は子供のムシ歯が洪水の時代でしたので、小児の治療に明け暮れておりました。私はその頃からアポイント制を採用してましたが、それでも50人前後は診ましたでしょうか。現在は、これは嬉しい事なのですが、小児の患者さんが非常に減りましたよ。

先生は予防歯科、特に小児に対するう蝕防止に深い関心をもたれ、42年頃、丸森賢二先生と出会い『横浜歯科臨床座談会』会員となられている。また47年には、オレゴン大学の予防歯科セミナーを受講され、予防歯科の方向性をご自身の中で確認されたようである。

Q：近年、しきりに予防歯科の重要性が言われてきましたが、その成果が、実ってきたというわけですね。

A：えぇ、量・質ともに良い方向に向かっていますね。9年前に『近代歯科医学への疑問』という論文に書きましたが、歯科医療とはずっと補綴中心の治療に重点が置かれていました。しかし、その主原因がプラークであると分かった以上、"予防に優る治療なし"の言葉通り、その啓蒙教育が歯科医の大切な役目だと思います。ですから小児の患者が減ったというのは嬉しい事ですね。

Q：予防の具体的方向は？

A：はい、予防と言いますとブラッシングや歯石除去に重点が置かれがちですが、食生活の管理の方がウエイトは高いと思いますね。例えば、高血圧の方にはそれに合った食餌療法がありますが、健康体の人に対する食生活の教育はありません。歯が悪くなってきたということは、全身に対する警告でもあるのです。これからはそうした食生活に関する患者教育も必要なのではないでしょうか。

Q：この辺の歯科医院状況については—

A：藤沢市30万人に対し150医院。地区によっては限度ですね。

Q：これからは若い先生が、どんどん開業していかれると思いますが。

A：今までは、患者があふれ、医院が少い楽な時期であったのですが、これからは患者さんが歯科医院を選択していく時代ですね。

Q：スタッフ構成は？

A：受付が一名と、午前に一名、午後に一名、パートで看護婦さんが来ています。土曜日には衛生士が来て重点的にブラッシング指導をしています。

Q：山の写真が多く飾ってありますね。

A：えぇ、会津で育ちましたから、スキー経験は45年。15年前からは、ハンティングもしてますのでその時の写真です。こうした仕事をしてますと、どうしても運動不足になりますから、年に何度かこうして山歩きをし、自分の健康状態を把握しているんですよ。

Q：特別注文のオサダユニットをご使用頂いてますが。

A：ご覧の通りスマイリーは、今オサダさんが採り入れている右前システムです。ユニオートのチェアーは動きがスムーズなので気に入ってます。それにジュニーを組み合わせたのは、患者さんの出入りごとに、いちいちワークテーブルを動かす必要がないようにです。使い易いですよ。

アシスタント紹介

大倉和子さん
金光紀代子さん
岡美佐子さん
秋山仁美さん
岡田直子さん
院長　横山五郎
副院長　横山純

横山歯科医院
岡山市南方2－1－26

新幹線岡山駅前を姫路方面に向かって徒歩でおよそ10分。院長の五郎先生は今年68才になられるといわれるが、ご子息の純先生と共にいまだ第一線でご活躍のご様子。体つきも考え方も10才は若く見える。「もう私の出る幕ではありませんよ」と云われ、インタビューは純先生が代わってお話し下さった。が院長先生は、今回ご紹介の衛生士さん全員が卒業された岡山歯科衛生士学院の生みの親。その頃(約25年前)は全国でも5～6校しかなかった衛生士の専門養成学校を、さらに、市の歯科医師会会長時にもう1校。衛生士の今後の職業確立と重要性を見透され、会の方々と共に設立にご尽力されたようだ。以来25年近く、両校の教務主任、また講師として衛生士養成に携ってこられただけあって、ご紹介の衛生士さんも、素直でやさしい――患者さん受けもきっと良いのだろうなァーとの印象。

まずは主任であり、6年のキャリアをもつ大倉さんに。

「主任といいましても、各自が自分の担当した患者さんの責任を最後まで受けもつ、という方針でやっていますので、全員責任感が強いですよ。先生のアシスタントとしての役目はもちろんですが、主な仕事は歯石除去・ブラッシング指導などです。むしろ、スキーやキャンプなど、仕事以外の時の主任が私かしら(笑)」

良い職場で幸せですね。せっかく歯科衛生士の資格を取得しても、その技術を十分に発揮させてくれる医院環境がありませんとね。金光さんは、ご結婚なさっているそうですが、職場との両立は？

「えぇ、私は勤務時間を午後3時までにさせて頂いてますので、十分両立しています。かえって、生活に張りがでるみたい。私も6年目です」

皆さん十分なキャリアをお持ちなんですね？

「でも、わからない事はまだまだありますね。診療中に見たり聞いたりして、先生から教わっています。また、患者さんとの接し方などの精神的な面は院長先生に相談しています」

とキャリア4年の秋山さん。

「新しい機器・材料等については、先生が使用している時に側についたアシスタントが昼休みにみんなに教えます」

岡さんも衛生士5年目だそうですが、受付などはどなたが？

「全員でやっています。みんな忙しくて空いている人がいない時は、原則としてその患者さんについていたアシスタントが担当します」

そうしますと医療事務も知っておかねばなりませんね。

「えぇ、医院に入ってから身に付けました。この医院では『ハイ、衛生士の仕事は済みました』では通用しませんから…」としっかりとしたご意見は、主任の大倉さんである。

岡田さんは、この4月から正式にスタッフとなられる実習生。午前は実習、午後は学院で勉強とご多忙な毎日。

「学院の友だちとそれぞれが実習に行った医院の話をしますが、ここは恵まれているみたい。先生も先輩も親切ですし…」

皆さん、この医院での仕事に満足しているご様子。そこで衛生士として大変な事、辛い事はとお聞きすると――

「仕事柄、常に患者さんに気を遣いますから疲れることもありますね」「『歯石除去はいいから早く治療してくれ』という患者さんがおりますとガックリします」「先生の治療前に患者さんの口腔内を見て症状を聞いても、信用してくれない」…等正直なご意見が聞かれた。全国の衛生士さんも、うなずかれるところがあるだろう。私たち歯科医療界に身を置く者には馴じみ深い「衛生士」という職業も、患者さんにはまだまだ理解されていないようである。

先号、日衛会の理事であられる瀬口良子さんの「歯科衛生士がプロフェッショナルとして誇りをもって働くためにも、会の組織の確立とP.Rがもっと必要…」という言葉が思い出される。

恵まれた環境と理解ある院長。ぜひ次代の歯科医療界のためにも頑張ってもらいたい、と願う次第である。

〔副院長から一言〕
私が技術的な事や新しい機器・材料の使用法などを教え、院長は精神的な方面を指導することが多いですね。それぞれが個性をもっていますから、その個性を伸ばす気持ちで指導していけば、本人も又医院のためにも良い環境を作り出していけるのではないでしょうか。衛生士の将来は、今後益益広がり、診療上、大切な分野になって行きますので、その為にも頑張って欲しいですね。私は大学での研究生活が長かったので、ここではキャリアの長い皆さんに教わる事が多いですよ(笑)。